



Title	『浄瑠璃』研究：十六段本『浄瑠璃』の考察を中心として
Author(s)	信多, 純一
Citation	大阪大学, 1981, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32924
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[2]

氏名・(本籍)	信 多 純 一
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	第 5 1 8 1 号
学位授与の日付	昭 和 56 年 3 月 11 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	『浄瑠璃』研究 ——十六段本『浄瑠璃』の考察を中心として——
論文審査委員	(主査) 教 授 田 中 裕 (副査) 教 授 宮 地 裕 助教授 前田 富祺

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は浄瑠璃節の濫觴といわれる作品『浄瑠璃』の原初形態を、もっぱら現存諸本の本文批判を通して追究し、推定した基礎的研究であるが、併せてこうして復元された作品の構成・文辞に基づいてその性格の吟味に進み、そこに強い唱導性を見出すに至っている。

本論文は序説、第一部「十六段本『浄瑠璃』について」、第二部「『浄瑠璃』の原像」から成り、これに「影印翻刻篇」として十六段本系の諸本、すなわち第一部でとりあげられた絵巻系三本と、第二部の本文批判の中心に据えられている山崎美成旧蔵写本との影印ならびに翻字を付載し、照合に供する。ほかに論者が本論文とともに、その『浄瑠璃』研究の三部作と考える先行の二論文、「浄瑠璃と『上瑠璃』と」と「〔浄瑠璃〕古活字版系写本二種」とを「参考論文篇」に収めて補足とする。次に本論文の要旨を述べる。

序説

『浄瑠璃』の原初形態に関しては、早く嵯峨本「浄瑠璃十二段の草紙」で周知の内容、すなわち牛若と浄瑠璃姫との恋物語を主部として、これに「申子」「吹上」「五輪碎」等の部分が発端ないし後日譚として増補されていったと見る編集説が有力で、したがって本作本来の性格も恋愛譚とするのが一般であり、「申子」「吹上」のもつ靈験譚の要素や「吹上」の利生譚に注目する説は一部にとどまっていた研究状況を述べる。また論者は多年『浄瑠璃』諸本の収集に努め、三種の新出版も得て諸本間の関係を考察した結果、特に本文異同についてはその理由を主として操りとの関係（操りにかける段階での演劇的处理や興行上の問題等）に見出そうとする従来の研究態度を疑問とし、まず徹底した本文批判の先行すべきことを確信するに至ったこと、さらに熱海本『浄瑠璃』、古活字版系諸本の考察

（「参考論文篇」所収）を経て十六段本『浄瑠璃』の重要性、とりわけ前記山崎美成旧蔵写本（以下山崎写本とよぶ）こそ諸本中の最善本であると知るに至ったこと等を略述し、最後に十六段本を中心に『浄瑠璃』の原型に到達し、併せて諸本の系統的関係を明らかにしようとするその立場を表明する。

第一部「十六段本『浄瑠璃』について」

第一章「山崎写本・絵巻系三本書誌」は、十六段本『浄瑠璃』四本の外形的解説であり、ついで第二章「絵巻系三本をめぐる」は、上記四本をさらに二分してその一つ、絵巻系三本（赤木甲本・乙本、大鳥本）について、それぞれの本文ならびに画図を比較し、また本文と画図との関連を論ずる。

まず(1)「赤木甲本・乙本の関係」について、両本は同系であるが所依の絵巻を異にすると説き、(2)「大鳥本と赤木甲乙本の関係」については、大鳥本は後者に対し同系異種というべく、段を十二段に省略編集するほか、本文の異同も多く、かなり以前に共通の祖本を出て派生を重ねてきた一本と見ている。つぎに考察は(3)「絵巻系三本の画図」に移され、その結果三本の祖本は二十四図をもつ絵巻であったこと、本文において最も欠陥の多い赤木乙本が、画図においてはかえって最も優れた状態を保持していること等を指摘する。そうして諸本がもつ画図の順序の混乱錯綜を本文との関係から、あるいは奈良絵本系諸本の画図の順序を参照して、正している。最後に推論は、(4)「絵巻系『浄瑠璃』の祖本」に至ってさらに遠くにおよぶ。すなわち論者は絵巻系三本の祖本よりなお古い『浄瑠璃』原絵巻の体裁が奈良絵本系諸本の画図との比較から推定される（両者の構図に直接的関連の見られることや、奈良絵本の冊子型の間に本来絵巻であった形態をしのばせる連続図が見られること等による）ことを知るのであるが、この原絵巻に比べると絵巻系祖本の本文はすでに抄出、編集を経たもので、画図においても相当量の省略があること、しかし構図はよく原絵巻のそれを残していること等を指摘する。

第二部「『浄瑠璃』の原像」

これは前記十六段本『浄瑠璃』四本のうちのいま一つの本、古本系と分類されている山崎写本を中心に据えた考察である。

第一章「『浄瑠璃』の諸本」は、『浄瑠璃』およびその改作を含めた四十四本を独自に整理・分類したもので、「参考論文篇」所収の「浄瑠璃と『上瑠璃』と」中の「(二)浄瑠璃の諸本」所掲の分類を摘記しているが、そのうちB系BⅡの分類標目については後述の第三章に修正がある。

第二章「山崎写本の位置づけをめぐる」は、十六段の段数をもち、「申子」から「御曹司都入」までの多彩な内容をもつ山崎写本が、これまで改造・書継ぎを重ねた恣意的な本と見なされ、高からぬ位置づけを与えられていた事情を記し、それに対して疑義を述べる。すなわち論者はその本文研究の結果、全般に極度の省略・要約の見られる本書が、他方において多量の増補・書継ぎを許す理由の薄弱であること、また増補・書継ぎと指摘されている部分は熱海本『上瑠璃』にも見られ、しかも両者の本文が一致すること等からこの通説に再検討を加える必要を説いている。

第三章「山崎写本を中心に見た『浄瑠璃』諸本の本文形成」は、本論文の中核となる章で、総合的な本文批判を、第一章で示された諸本のうち、各系統を代表する数本について行う。まず論者は山崎写本こそ原『浄瑠璃』を要約したもので、それに最も近い構成をもつという判断から、その本文を基

準として諸本の本文を対照し、ついでこうして作成された校異について一連の考察を加える。その結果原『浄瑠璃』は、「申子」「御曹司鞍馬入」「鞍馬下」「泉水揃」以下「御座移」の各段から「吹上（二段分）」「秀衡入」「笹谷（二段分）」「御曹司都入」までを含む長大かつ豊富な作品であることが明らかにされ、細部の文辞にまで吟味はおよぶ。また現存の『浄瑠璃』諸本の本文はいずれも同系統に属すること、いかなる本にも増補と思われる箇所は見出されず、本文異同の生じる理由は省略、省略による破綻をつくろうための補筆、錯簡（絵巻において用紙の剝離によるものが多く、かつ大きな異同を生じている）のいずれかによること等が指摘され、したがって校異を詳細に検討すればいずれ一つの文辞に帰着すると説く。さて山崎写本についていえば、それが一見粗本とされたのは、前述のとおり本作を筆録するとき骨格は残しながら文辞の肉付きを極度に削いだためにすぎないことが確認されるが、他の諸本もまたその相互の関係、それぞれの性質・特徴が、ようやく復元された本文に照して明らかとなる。したがって前記第一章に整理・分類されたB・C系の諸本も改めてより詳細な規定、位置づけを受けることになる。

第四章「原『浄瑠璃』の世界」は、以上のようにして復元された原『浄瑠璃』の一性格を論じたもので、吹上浜における義経のあり方、その描写に焦点はおかれる。この力なき義経像は義経伝説で知られた英雄的なそれに比べてすこぶる特異といわなければならないが、それは、一に蘇生譚の形成という創作動機に導かれたものであり、同時に峯の薬師の申子浄瑠璃姫の本地利生譚に直接つながる、と知るとき、はじめて納得できるものであると指摘する。つまり本作は成立当初より、浄瑠璃姫の申子としての誕生、恋の苦難、その悲劇的、やがて成神成仏の過程を辿る本地物として構想されていたわけで、そこに唱導性が濃厚に認められると結論する。

論文の審査結果の要旨

本論文は論者の多年にわたる『浄瑠璃』研究の頂点を示すもので、「参考論文篇」として付けられた先行二論文の成果もほぼここに収束されているとあってよい。その研究内容の大要は前記要旨にもうかがわれるとおり、まず資料の収集に始まって諸本の整理・分類に進み、やがて最善本が確定され、ついでこれを基準として現存諸本の本文批判が総合的に遂行され、『浄瑠璃』の原型の復元におよんでいる。しかもその結果、ようやく明らかになったのは原『浄瑠璃』のもつ唱導性で、論者の追究はついに性格論にふみこむに至っている。しかし本論文の主体となるのはもとより前者本文批判的研究で、性格論に関するこの優れた指摘もこれらの基礎的作業のはてに当然期待される成果の一つであったとあってよい。これらの基礎的作業は相互に緊密に結びあう一連のそれであるが、いましばらくそれぞれの作業段階に分けていえば、そのいずれについても論者はそこで提出された課題の解決に最善を尽くし、またそれにふさわしい成果を収めたように見える。まず資料収集についていえば、新出本三種を含む諸本、とくに論者が関心を注いだ十六段本系のそれ（「影印翻刻篇」所収）が目され、その影印と正確な翻字との成果が評価される。つぎに最善本の確定に関していえば、一般に改造ないし書継

ぎ、あるいは単なる編集物と見なされていた山崎写本の性質・位置を正しく認め、それによって錯雑して整理困難とさえ思われた諸本の関係を解きあかした点も注目される。そればかりでなく本文異同の生じる理由について、これを直ちに操りなど別次元の問題に移し替える一般の研究態度に疑義を懐き、何よりも厳密な本文批判を先行させる必要に想到したことも、当時の操りの演出・舞台について何一つ知るところのない研究段階、あるいは関連諸学の方法の借用にたやすく誘惑されるこの分野の一傾向等に対する、それぞれ冷静な反省に基づくものとして注目される。このとき本論文を支える論者の研究態度、方法の基礎は確立されたといつてよい。

さて本論文で最も注目されるのは諸本を対象とする総合的な本文批判の作業で、やや詳細に前記要旨でふれた第二部第三章を中心とする研究であるが、ここで論者の力量すなわち学力はもとより、惜しめない努力、克明周到な操作と判断、さらに新鮮な着眼等は遺憾なく発揮されたといつてよい。本文批判ばかりでなく、絵巻系三本の場合など画図の順序・位置の確定の作業にもそれはうかがわれる。その結果研究者がなお一様に最善本を摸索している研究の現状にあって、一挙に『浄瑠璃』の原型を提示し、文辞の細部まで復元の可能性のあることを示唆したことは高く評価されなければならない、本論文の最大の成果もそこにある。

つぎに性格論にふみこんだ指摘も注目されるものである。論者によって復元された原『浄瑠璃』はまことに雄篇とよぶに恥じないもので、従来「十二段草子」として知られていた恋愛譚の世界はこの長大な本地利生譚の一要素、恋ゆえの苦難を語る一局面にすぎなかったと知られる。また「参考論文篇」所収論文に指摘されている点であるが、峯の薬師の本地物である本作が常の本地物のもつ叙事性に併せて、その中心に抒情的景事を豊富に含みもつことも注目される。もしこれを文明期すでに成立していた『浄瑠璃』の特質とするなら、以後の浄瑠璃曲の研究の上に投じる問題はけっして小さくはないであろう。のみならず優れた本地物であることが明らかにされたいま、ようやく民俗学をはじめ関連諸学との提携による多面的な研究の確かな基礎が据えられたといわなければならない。

最後に本論文の不備と思われる点を列記すれば、本論文が論者のいわゆる三部作の一つとして構想された事情もあって、構成・記述に偏りの見られること、また本研究の目標である原型の復元に必要な校異表の作成が、本文関係の最も錯綜している、山崎写本でいえば十段目までを中心とするにとどまっていることもそうで、周備した校本の提示が望まれる。さらに第一部における原絵巻と第二部における原『浄瑠璃』とを関係づける記述も必要であり、諸本それぞれ補筆はあっても増補はないという明快な判定についてもより詳細な説明が望まれる。用語では「同系」「同根」等の規定に曖昧さが残るようである。

以上望蜀をも含めて若干の指摘を試みたが、それらはもとより既述のと通りの卓越した諸成果を損うものではなく、本論文が学位請求論文として十分に価値あることを認定する。